

書評 湯本香樹実著『夏の庭：The Friends』（新潮社，2001）  
（新潮文庫 ゆ-6-1）

文学部文学科日本文学専攻 3年 吉田 辰夫

死んだらどうなってしまうのか。誰もが一度は抱いたことのある疑問でしょう。生きている限り、死というものを無視することはできません。人は生き、必ず死ぬのです。例外はありません。それ故、人は死を恐れ、死を知ろうとします。

人の死にふれたことがなく、人は死ぬらしいとだけ知っている小学生の主人公たちが、山下から葬式の話を知り、死というものに興味を持つのは当然の事です。死んだ人を見てみたいと思うのも、仕方がないことです。

そこで主人公たちは町に住んでいる一人暮らしの老人が死にそうだとこのことを知り、死に立ち会うために、老人を監視し始めます。初めは探偵のように尾行したりして老人を監視しているだけですが、そのうちに老人と接触、交流するようになり、親しくなっていきます。その親しさは、おじいさんのために人探しをするほどにまでなります。おじいさんの死ぬところが見たいと思っていたことなどもはや忘れてしまったかのように、おじいさんとの日々を過ごしますが、サッカーの合宿に行き、4日会わないうちに、おじいさんは死んでしまいます。

おじいさんの具体的な死の場面は描かれてはいません。おじいさんは静かに、誰にも看取られることなく死んでいくのです。おじいさんの家にやってきた主人公たちが死んで時間のたったおじいさんを発見するだけなのです。おじいさんの死の場面を当初の目的のように、主人公たちがおじいさんの死ぬ瞬間に立ち会うという感動的な場面にするにもできたでしょう。しかしこの小説はそのような結末を迎えはしません。死の場面を劇的に描くのではなく、あくまで日常の一部として描く。死は劇的なものだと思われがちですが、この小説のように、日常の一部であり、実にあっさりとしたものでもあるのです。そのことをこの小説は教えてくれます。

この小説の素晴らしいところは死だけではなく、生の部分もきちんと描かれているところです。松田や松下を交えて、小学生たちの生き生きとした姿が描かれていますし、おじいさんと主人公たちの交流、種屋のおばあさん、古香弥生さん、パチンコ店の店長などの人物との出会いが温かく、丁寧に描かれています。また、人物だけでなく夏という季節、自然の描写も生命力に満ち溢れています。生と死は表裏一体です。死というものをテーマにした小説だからこそ、このような生の部分がより輝くのかもかもしれません。

何かに行き詰まった時、何か悩んだ時、この小説を読むことで、死ということについて、生きるということについて深く考えてみるのもいいのかもしれない。生きるということにおいて、生と死について考えることは大切なことなのですから。